

舵を切る



「四賢婦人・矢嶋楯子の生涯」

文 福永無想

最終回 「天に召される時」

大正10(1921)年の秋のこと。半年前に満州から帰国した楯子が、再び渡米しワシントン軍縮会議に出席すると言う。矯風会会頭を小崎千代子に譲った今では、日本を長く離れてもさしつかえはなかった。とはいえ、15年前に渡米した時とはわけが違う。

少し前のこと。矯風会久留米支部長の夫の渡邊金三が楯子を訪ねた。

「軍縮会議開催を可能ならしめた最大の力は、新しい投票権を持つことになった二千六百万人の婦人、そして宗教家の力です。日本からも政府関係者のみならず民間の有志、特にクリスチャン婦人の参加は必要です」

そんな渡邊の熱い思いを受け、楯子は自ら手を上げたが、周囲の者はこの渡米には猛反対する。「なあに、天国は日本からでもアメリカからでも距離は同じでしょう」

そう笑い飛ばす楯子には、戦争で夫や息子を失った女性たちの悲しみに寄り添い、世界平和への祈りをささげたいという思いが深くあった。

旅に同伴した会の守屋東との船中での食事

の時、楯子はふと思いついたように話し出した。「東京に来たばかりの時、大きな鯨をもらったけど食べる気にならなくてね。鯨は水の中の悪いものを食べるというので井戸に放り込んだら、すっかり痩せて。井戸水は悪くなかったわけど、鯨にとつては食料不足で災難でした」魚料理を口に運びながらこの話を持ち出す楯子を見て、守屋は腹を抱えて大笑いした。

2人はニューヨークに数日間滞在し、ワシントンに向かった。11月7日、楯子はアメリカ矯風会会頭の案内で、ホワイトハウスを訪ねた。15年前、ここでセオドア・ルーズベルト大統領は楯子の手を取り、世界平和を約束してくれた。こうして二度も、ホワイトハウスに迎えられた民間の日本人などいるだろうか。楯子はウォレン・ハーディング大統領に面会すると、平和を願う日本の女性1万人の署名を渡した。

「世界の平和と、あなたのために祈ります」大統領にささげたこの「平和の祈り」は新聞でアメリカ中に報道された。第一次世界大戦での悲惨な出来事は、世界中に悲しみと苦しみを与えた。それだけに90歳を前にした老体の身で、はるばる日本からやって来た楯子の行動と勇気に、多くの人々が胸を打たれたのだ。

そして楯子は毎日のようにレセプションに、講演に招かれた。「私がアメリカに来ました理由は、皆さまと世界平和のために切なる祈りをささげたいからです。それがこの年になるまで、いくつもの戦争を見てきた者の責任であります」

楯子は多くの教会に赴き、出国寸前まで人々と平和の祈りをささげたのだった。

大正11(1922)年1月21日、天洋丸は横浜に着いた。

「生身で帰ることができましたね、東さん」楯子は笑って守屋を安心させたが、その1週間後ついに倒れた。原因は過労だ。様態は深刻で、昏睡状態が続く誰の目にも絶望的と思えた。だが春が来る頃には回復の兆しをみせ、周囲を安心させたのだった。

「神様が『まだ来るな』とおっしゃったのね」床に伏しても楯子の儼かな品格は薄れることなく皆は、こうして存在してくれるだけでありがたいと思うのだった。そんな折、朗報が飛び込んだ。「未成年者飲酒禁止法」が国会を通過したという。知らせを聞いた楯子は、ベッドに正座して感謝の涙を流した。

翌年の9月1日。関東大震災が東京を襲った。幸いにも楯子は姪の落美らに守られて大久保百人町の婦人ホームに避難し難を逃れたが、震災から2年目の、大正14(1925)年6月14日の日曜日のことだった。

その日楯子は見舞いに訪れた矯風会の村上正子と、どうしても昼食を共にしたいと珍しくわがままを通した。その直後のこと、様子を見に来た看護師が楯子の異変に気付く。そしてそのまま眠るようにして翌15日の午後11時、楯子は天に召された。己に正直に生きた92年。人生最後の顔は、実に安らかであった。

矢嶋楯子という船の、人生の海原はいつも穏やかではなかった。だが彼女は、自ら切った舵の水先を後悔することはしなかった。その強さとしなやかさ、そして慈愛に満ちた生きざまは、その死から100年余りたった今も、これからも私たちの心に深く刻まれていく。(完)

※この物語は、矢嶋楯子の資料をもとに描いたフィクションです
※参考文献=「矢嶋楯子伝」(徳富蘇峰・監修、久布白落実・著/不二屋書房)、「矢嶋楯子の生涯と時代の流れ」(齊藤省三・著/熊日新書)、「熊本のハンサムウーマン」(堤克彦・著/熊本出版文化会館)、「矢嶋楯子伝 われ弱ければ」(三浦綾子・著/小学館文庫)、「明治女性史」(村上信彦・著/理論社)、「まんが四賢婦人物語」(益城町)

四賢婦人記念館

益城町杉堂1250 電話/286-4959

開館/9時30分～16時30分 休館/月曜(祝日の場合は翌日)

入館料/一般・高校生200円(160円)、小中学生100円(80円)

※()は30人以上の団体割引料金

益城町に生まれ、激動の時代を凜として生き抜いた矢嶋家の女性たちの生涯に、「四賢婦人記念館」で、ぜひとも触れてみてください。1年10カ月にわたり、矢嶋楯子の生涯をフィクションで描いた「舵を切る」をお読みいただき、ありがとうございました。

